

神戸市のフローリスト 甲把さん(高知市出身)

花の力で人を幸せに

大切な人への祝福の贈り物や、イベント会場の装飾として欠かせないフラワーアレンジメント。華やかな花の造形が人の目を楽しませ、心を和ませる。「見る人を幸せな気持ちにしたい」。神戸市を拠点に活動する高知市

出身のフローリスト、甲把準さん(33)は神戸市中央区。のどかで癒やされる田園風景の再現」をテーマに創作活動に励んでいる。

(大阪支社・山崎道生)

癒やしの風景再現がテーマ

六甲山の北側に広がる神戸市北区。周辺の山林の合間を単線の電車が走り、のどかな風景に包まれる。その住宅地近くにあるスーパリーの駐車場内に立つ小屋の倉庫が、甲把さんの「アート」だ。

訪ねた時は「母の日」用のアレンジメントに合わせ、30分ほどをかけた。

「花にはすごい力があるんだ」

神戸市内の大学を卒業後、福祉関係の仕事を目指し、同市内の専門学校で精神保健福祉士の資格を取得した。その実習中、それまで話し掛けても反応のなかった施設の入所者が、花を手渡すと笑ってくれた。

■自分なりに

「持ちの良さ」にこだわらなから、自分の作風を追求。花屋に勤める傍ら、4年前から個人名義で注文を受けるようになり昨年4月、個人ブランド「Vince(ヴィンス)」も立ち上げた。Vinceは画家ゴッホの名前から。幼いころに見た代表作「ひまわり」の印象が忘れられないという。

完成するとスマホで依頼者に写真を送信する。贈答用で、直接完成品を見られない人へのサービスだ。全ての作品に品種と管理方法を書いた説明文を添える。つぼみを交えるなど、花の伸びや色など時間の経過とともに移ろう変化を楽しめるよう心掛けるのも、自分なりのやり方だ。

顧客は北海道から九州まで50人ほどで、20代から年配者まで幅広い。「夏場も花持ちが他とは全然違う。飾る場所や状況に合わせた配慮も細かい」。3年半前から購入しているという千葉県船橋市の永光美和子さん(60)は自らもアレンジメントを学んだ経験があるだけに、甲把

「覚えてもらいやすい名前だし、今では感謝していますよ」。甲把さんは2年前、祖母が亡くなった時、「甲把で良かった」と手紙を書き、ひつぎに入れてもらった。

そんな経験が、花との関わりを引き寄せたのかもしれない。職場近くの六甲山周辺の自然も、家族でよく訪れた四万十町の母親の実家とどこか似ているという。

■違う名字

甲把さんは1歳の時から、一緒に暮らす両親、兄とは別の姓で育った(両親らの姓は山本)。高岡郡四万十町出身の母、真利子さん(63)の実家の名を残すため、祖母と養子縁組をしたためだ。

今年も母の日に兄と連名で、アレンジメントを贈った。団体役員の真利子さんの退職が近いこともあって、いつもより大きな花に。「いつもありがとう」のメッセージを添えた。

「花を好きになってくれる人を一人でも増やしたい」。花への探求心と、人を思いやる心が真つすぐに伸びていく。



フラワーアレンジメントを作る甲把準さん

(写真はいずれも神戸市北区)



甲把さんが手掛けたフラワーアレンジメント